

| | | |
|------------|---|--|
| 受賞者氏名 | 山道拓人(法政大学デザイン工学部建築学科専任講師)・千葉元生・西川日満里 |  |
| 所属 | ツバメアーキテクト(代表取締役)/法政大学デザイン工学部建築学科専任講師 | |
| 受賞年月日 | 2021/10/20 | |
| 国内・国外 | 国内 | |
| 授与機関等名称 | 公益財団法人 日本デザイン振興会 | |
| 受賞名 | 2021 年度グッドデザイン賞 グッドデザイン・ベスト100 | |
| 受賞(研究)内容詳細 | <p>受賞対象名:商店街 [ボーナストラック]</p> <p>[下北沢の街並みを引き継ぐ新築の商店街] 下北沢では、複雑に入り組む細い路地に個性豊かな小売店が連なることで、独特な街並みが形成されてきた。しかし、近年の賃料高騰により大手チェーンが増え、こうした風景が失われつつある。地下化した小田急線の線路跡地に建つ「BONUS TRACK」は、個人が小商いを始めやすい環境を生み出すことで、下北沢の街並みを引き継ぐ新築の商店街をつくる計画である。</p> <p>[個人商店が入居しやすい区画設定] 個人が店舗を持続して構えやすいように、区画面積と賃料設定のバランスを調整しながら計画を進めた。その結果導かれたのが、一区画10坪(住戸5坪、店舗5坪)の兼用住宅である。全体は4棟の兼用住宅(SOHO棟)と、1棟の商業施設(中央棟)によって構成されており、SOHO棟のうち3棟がこのサイズの区画を三つ連ねた長屋である。中央棟は気積の異なる50～140㎡の区画と共に、共用ギャラリー、シェアラウンジ、トイレ、ゴミ置場など区画の小さな店舗をサポートする機能を持っている。</p> <p>[49%の余白] 職住近接の兼用住宅としたのは入居しやすい環境を生み出すと共に、入居者が実際に住んで当事者意識を持つことが、この場所を育てていくことにもつながるからである。兼用住宅とすれば、住宅地のうち49%は住宅以外の機能を持つことができる。この49%の余白を活用していくことで、住宅地をまったく別の環境へと生まれ変わらせることができないだろうか。「BONUS TRACK」は、ここでの枠組みを近隣の空き家活用へと展開していくためのロールモデルとしても位置付けられている。</p> <p>[改変を促す設えと仕組み] 下北沢の街のように、入居者自身がこの場所に手を加え続け、育てられる場所としたい。そのために、改変を加えやすい設えを施すと共に、そのための仕組みづくりを行った。片流れ屋根の組み合わせによる外形や分節された外壁、軸組み現しの内部空間など、建築は個々で完結しないように計画。更に仕上げを変えられる外壁や庇、コンクリートのカウンターなど、手を加えられるエレメントを全体に散りばめた。その上で、内装監理という立場で、どのような改変方法があり得るかを明確化し入居者に示すことで、積極的な改変を促すエリアマネジメントを行った。</p> <p>[住宅地の中の雑木林] このエリアはかねてより、不足している緑を増やすことが地域住民から求め</p> | |

られていた。そこで雑木林の中の商店街をコンセプトに、緑をふんだんに配した外部空間を大きく設けた。この外部空間にはリースラインを設けていないため、各店舗が自由に家具やサインを設置できる。入居者にとっては小さな内部空間を補完する共用の庭であり、近隣の人々にとっては、民間の鉄道会社の土地でありながら、公園のような役割も持っている。

[アフターコロナの都市空間]


コロナウィルスのパンデミックにより、通勤を前提としたオフィス街とベッドタウン、内部の床面積を追求する商業ビルなど、機能で分化し経済合理性を追求してきた近代都市は機能不全に陥った。終息後には都市機能の再配分や、生活圏の環境の見直しが益々加速していきだろう。竣工と緊急事態宣言の発出が重なったが、職住近接、外部空間の活用を目指してきたこの施設は、店舗ごとの判断で徐々にオープンすることができた。近隣住民がふらっと散歩で訪れ公園のように利用する様子も度々目にした。これからの生活圏のあり方を議論し計画してきた「BONUS TRACK」は、早速その空間的可能性を示すこととなった。


| | | |
|------------|--|--|
| 受賞者氏名 | 山道拓人(法政大学デザイン工学部建築学科専任講師)・千葉元生・西川日満里 |  |
| 所属 | ツバメアーキテクト(代表取締役)/法政大学デザイン工学部建築学科専任講師 | |
| 受賞年月日 | 2021/10/20 | |
| 国内・国外 | 国内 | |
| 授与機関等名称 | 公益財団法人 日本デザイン振興会 | |
| 受賞名 | 2021 年度グッドデザイン賞 | |
| 受賞(研究)内容詳細 | <p>受賞対象名: 建築[押上のビル PLAT295]</p> <p>本プロジェクトは、シェアオフィス・シェアキッチン・賃貸住戸・オーナー住戸が一体となった5階建てのビルである。既存建築の建て替えが決まった時点で、ハウスメーカーが施工を担当することが決まっていた。下町の結節点となるシェアオフィスやシェアキッチンをつくりたいという施主の要望があり、建築に「ハウス」以外の用途が混ざることになった。ハウスメーカーの構法を使いながらも、職住近接を実現するために施主の翻訳者のような立ち位置としてツバメアーキテクトが伴走することになり、施主・ハウスメーカー・建築家の3者で協働を行いながらプロジェクトが進行した。</p> <p>ツバメアーキテクトとしてはデザインの「調整役」としてではなく、ハウスメーカーの構法を駆使することによって、汎用性高くかつ場所に寄り添った使い方を可能にする新しいバランスのビルをつくることを目指した。</p> <p>プロジェクトが開始して以降、幾度となく持っていく提案に、メーカーによる制約が立ち現われ、その特徴を理解することから始まり、無足場工法をはじめとした狭小・角地への敷地対応力などの強みが解明された。そのノウハウを最大限に活かしながら、ルールに則りながらも従来の商品化住宅の枠を越えた新たなプロトタイプとなるような職住一体の建築を実現した。産業的構法の中で、シェアスペースやバルコニーなどの都市に開いた「活動領域」と「住戸領域」を均衡させたことで、コロナのような予期せぬ状況にも柔軟に対応できるようなビルとなった。</p> <p>スパンを調整し、窓を大きくして換気性能を上げた1,2階部分のシェアスペースはコロナ禍でも活躍している。地域に住む youtuber が撮影スタジオとしてシェアキッチンを使うなど、さまざまな使い方が使い手によって日々発見されている。</p> <p>住宅部分も自由度の高い間取りにした。〇LDK といった不動産的な見栄えをよくするために部屋数を増やすというよりは、水回りを集約し、それ以外の領域を路地側に回し、スカイツリーに向けバルコニーもテーブルセットが置ける程度に大きく取った。廊下がほとんどないので、立面の窓がリズムカルに室内にも現れる。</p> <p>職住がハイブリッドした様子が立面にも現れるようにしたり、ルールを持ちながらも自由な配置の窓を強調するために額縁にしたりという細かい意匠もメーカーのタイル施工ルールの中で「ハリ分け」や「目地」を駆使することで対応した。</p> | |

バルコニーの手すりは責任区分を分けオリジナルでつくった。スリットを開けロッド渡し、パンチングメタルで押さえ、各所に植物や飾りを付けられるようにした。また、これらの立面に出てくる特徴的な要素は、コーニス、ストリングコース、ポルティコなどパラッツォの要素を参照し形状を決定した。

メーカーの鍛錬された汎用性の高い構法の中で、建築家はその可能性を拡張するように実践することは社会にとってもインパクトを導くきっかけになるのではないか。

ハウスメーカーの構法をスタートポイントとして、建築家による応用、そして文字通り建築を立体的に使いこなす施主の実践が連なることで、新たな協働の可能性が見出されたプロジェクトとなった。

| | | |
|------------|---|--|
| 受賞者氏名 | 山道拓人(法政大学デザイン工学部建築学科専任講師)・千葉元生・西川日満里 |  |
| 所属 | ツバメアーキテクト(代表取締役)/法政大学デザイン工学部建築学科専任講師 | |
| 受賞年月日 | 2021/10/20 | |
| 国内・国外 | 国内 | |
| 授与機関等名称 | 公益財団法人 日本デザイン振興会 | |
| 受賞名 | 2021 年度グッドデザイン賞 | |
| 受賞(研究)内容詳細 | <p>受賞対象名: 集合住宅の一棟まるごとリノベーション [リノア北赤羽]</p> <p>リノア北赤羽は社員寮として使われていた建物を 147 戸の分譲住宅へと改修した物件である。ツバメアーキテクトはその共用部の設計を担当した。</p> <p>集合住宅の共用部、いわゆるコモンスペースは、公と私を緩やかに繋ぐ中間的な領域として位置付けられてきた。しかしその実は、セキュリティを過剰に高めるなどして、私の領域を公から断絶する役割へと陥ってしまいがちである。一方で、コモンスペースを排除することで階層性をなくし、公と私を連続させるような試みもなされてきた。しかし、それだけでは集合して住まうことの価値を生かしきれないのではないかと。147 世帯の人びとが新たに移り住んでくることが、まちをよくすることに繋がってほしい。コモンスペースを私の領域を拡張できる場所にして、また公の領域を呼び込める場所にして、住民と地域の人びとが暮らしのスキルを共有できるまちのコモンズにできないか、そんなことを考えて計画を進めた。</p> <p>まず、住民に積極的に活用してもらうために、コモンスペースを暮らしの延長として使える場所に設えた。上層階のふたつの集会室は、大きなテーブルのある共用リビングと音楽やダンスができる防音室に、エントランスには可動キッチンやシェアランドリーを付随させ、その隣室には住民や地域の人々が日替わりでお店を出店できるシェアキッチンを設えた。家の中では納まりきらない活動をサポートするために、可動であったり、ややオーバースケールであったりと、家具や設備に特徴が現れた空間となっている。さらに、この場所に住民以外の人も呼び込めるように、前面道路との境界を隔てていた擁壁と植栽を撤去し、全長 49m 高さ 4.5m の都市的なスケールを持ったパーゴラを設えて、地域へ開かれた構えを生み出した。パーゴラ下には歩道のアスファルトや内部の仕上げを連続させ、敷地境界が曖昧になるようにした。</p> <p>現在、シェアキッチンには、地元のカフェやこども食堂を運営する団体が入居し、近隣で働く人や子どもたちなど多様な人が訪れる場所となっている。また、住民主催の体操教室に、他の住民や地域の人々が参加するといった動きも生まれている。販売した住戸はまだ 1/3 で、1 年を掛けて順次改装、販売していく。この期間にリビタがコモンスペースの運用を試行錯誤して、活用を促し、組合に引き渡していく予定である。公と私の中間にあるコモンスペースではなく、住民も地域の人々も自分ごととして参加できる、そんな空間を集合住宅が抱え込めれば、集まって住まうことがまちのコモンズを育てていけるのではないかと感じている。</p> | |

| | | |
|------------|---|---|
| 受賞者氏名 | 山道拓人(法政大学デザイン工学部建築学科専任講師)・千葉元生・西川日満里 |  |
| 所属 | ツバメアーキテクト(代表取締役)/法政大学デザイン工学部建築学科専任講師 | |
| 受賞年月日 | 2021/12 | |
| 国内・国外 | 国内 | |
| 授与機関等名称 | MFU 一般社団法人日本メンズファッション協会 | |
| 受賞名 | ベストデビュタント賞 空間・インテリアデザイン部門 | |
| 受賞(研究)内容詳細 | <p>ベストデビュタント賞 web より引用 「デビューを飾った新人クリエイター&アーティスト達の中から、特に1年の活動が社会・文化・業界・一般の方々に支持され、影響を与え、将来を期待される人たちを各部門で選出しました。」</p> | |